

第2回 (仮称) 浦安市子ども図書館基本構想策定懇談会 会議録

- 1 開催日時 平成30年9月28日(金)14時～16時15分
- 2 開催場所 市役所10階 協働会議室
- 3 会議次第 下記のとおり
- 4 出席者
(懇談会)：中澤会長、汐崎副会長、井上委員、羽田委員、杉山委員、山田委員、赤塚委員、大宮委員、河野委員、平岡委員(10名全員出席)
(策定委員会)：八田委員長、高梨副委員長、大友委員、金子委員、大塚委員、島崎委員、菅原委員、加藤委員
(事務局)：生涯学習課：斉藤主幹、島本副主幹、石井政策専門官、井口主任学芸員
コンサルタント2名

【会議資料】

【資料1】 第1回(仮称)浦安市子ども図書館基本構想策定懇談会会議録

【資料2-1】 第1回策定懇談会における質問事項(参考資料1の補足資料)

【資料2-2】 子どもの読書活動推進等に関する浦安市の既定計画における取り組み

【資料3-1】 (仮称)浦安市子ども図書館基本構想検討に向けた意識調査の実施について(途中経過)

【資料3-2】 (仮称)浦安市子ども図書館基本構想策定に向けた市民意向調査の設問一覧

【資料3-3】 (仮称)浦安市子ども図書館についての調査(小学1～3年生用)

【資料3-4】 (仮称)浦安市子ども図書館についての調査(小学4～6年生用)

【資料3-5】 (仮称)浦安市子ども図書館についての調査(中学生用)

【資料3-6】 (仮称)浦安市子ども図書館についての調査(高校生用)

【資料3-7】 (仮称)浦安市子ども図書館について「子育て世帯アンケート調査」

【資料3-8】 (仮称)浦安市子ども図書館に関するアンケート(図書館利用者)

【資料3-9】 (仮称)浦安市子ども図書館に関するWebアンケート設問

【資料4】 子どもの読書活動に取り組む団体等からの意見聴取について

【資料5-1】 学校図書館の連携に関するアンケート結果のまとめ

【資料5-2】 市立図書館司書インタビュー結果のまとめ

【資料6】 浦安市立図書館の発達段階に対応した児童サービスについて

【資料7-1】 子ども図書館参考事例(近隣・最近の事例)

【資料7-2】 (仮称)浦安市子ども図書館のめざすもの

【会議次第】

1. 開会
2. 会長あいさつ
3. 報告
 - (1) 第1回策定懇談会の会議録の承認について
事務局：資料1に基づいて説明。
会 長：意見・質問なければ、承認いただいたこととする。

(2) 第1回策定懇談会の質問に関する補足資料について

事務局：資料2-1、2-2に基づいて説明。

会 長：資料2-1のグラフで平成14年から平成20年にかけて中学生の不読率が大きく下がっているが、何かあったのか気になる。

委 員：千葉市でも不読率を調査したが、各学校によって結果がバラバラだった。不読率についてはどのような基準であるかが問題である。

委 員：資料2-1について、読書をしない高校生には2つの問題があるということで、中学生までに読書習慣が形成されていない場合については考察があるが、高校生になって読書の関心度合いが低くなり本から遠ざかっている場合については記載がないのはなぜか。

事務局：本資料は前回の会議での質問に対する回答として作成しているため、その点については記載しなかった。ご指摘の点も課題であるため、今後、その対応策も含めて、本会議の中で議論していただきたい。

委 員：個人的な印象としては、浦安のように子どもの時期に対する取り組みがされていれば、一定の読書習慣は形成されていると認識している。どちらかといえば、受験などの他の要因があって読書から離れていくという点が課題として重要であると感じるので発言させていただいた。

(3) 意識調査の実施について（途中経過）

事務局：資料3-1～3-9に基づいて説明。

会 長：次回の会議で結果の報告があるということで、楽しみにしたい。

(4) グループインタビューの実施について

事務局：資料4に基づいて説明。

委 員：グループインタビューについて、参加された人数はどの程度か。

事務局：会の都合で、読み聞かせ活動の後、残ることができる方をお願いしたため、参加者は1人の場合もあれば3～4人の場合もあった。活動団体の多くが、そもそも数人規模であり、10数人いるような団体は少ない。

委 員：グループインタビューの良いところは、数人に複数のグループ同時にインタビューすることで、潜在的に抱えている課題やニーズを引き出すという点である。複数の団体に集まって話をしてもらえれば、より良い意見が伺えたかもしれない。

4. 議事

(1) 学校図書館の連携に関するアンケート結果のまとめ

事務局：資料5-1に基づいて説明。

委 員：学校図書館に図書館が本を貸し出していると思うが、図書館の蔵書はウェブで公開されているのではないのか。

事務局：ウェブで一般貸出用の本は検索できるが、団体貸出用の本は検索ができない。

委 員：学校同士で貸し借りができるということは、学校のシステムで全市の学校の蔵書が検索できるようになっているのか、あるいは情報共有がされているということか。

事務局：システムで他の学校の所蔵が検索可能なのはわからないが、情報共有はされているようである。調べ学習のテーマなどは共通なので、必要な資料の貸し借りをしているようである。

委員：学校司書の経験値やコミュニケーションで、やりとりしているということか。

事務局：以前、学校司書から聞いた話によるとそうだと思うのだが、具体的な方法はわからない。

会長：学校図書館のつながりも非常に重要である。

(2) 市立図書館司書インタビュー結果のまとめ

事務局：資料5-2に基づいて説明。

委員：人員削減とあるが、どの程度削減されたのか。

事務局：図書館では、平成29年度末で正規職員が退職も含め、4名減となった。その穴埋めとして、平成30年度は資格を持った非常勤職員を4名補充している。人員の増減はないが、経験のあるベテランの正規職員が減少し、経験の少ない職員が増えたことになる。

委員：子どもと接する経験は、サービスを行う上で非常に重要であると思う。中央図書館の大規模改修工事期間の類縁機関へのサービスは、どのようになるのか。

事務局：改修工事期間は、分館から学校や幼稚園に職員が出向き、子どもへのサービスの経験をつないでいきたいと考えている。

(3) 浦安市立図書館の発達段階に対応した児童サービスについて

事務局：資料6に基づいて説明。

会長：読書の発達段階という概念は、非常に興味深い。

委員：この段階の設定は、阪本一郎先生の子どもの読書の発達段階をベースにしていると思うが、1970年代の考え方であり、その後新しいものが出ていない。子どもの生活実態や発達はそう変わるものではないが、ここで示された発達段階に対応する年齢は前後している可能性がある。参考程度に使用するべきではないか。

事務局：元にしたのは、学芸図書が1995年に出版した『読書教育通論 児童生徒の読書活動』の中の「読書能力の発達」を一部改変されたもので、植松貞夫、鈴木佳苗編の現代図書館情報学シリーズ6「児童サービス論」の中にある表である。平成29年11月2日に開催された「子どもの読書活動の推進に関する有識者会議」の資料とされていたため、使用した。あくまで参考として活用している。

委員：年齢別のブックリストを作成されていると思う。間接的ではあるが、発達段階別の読書活動に含まれるのではないか。どういったブックリストを作成しているか、教えていただきたい。

事務局：本資料には記載していなかったが、ブックリストを作成、配布している。

委員：ブックスタートで本を配布する際に、0・1・2歳向けのブックリストも全員に配布している。この他に、4・5歳児向け、小学校低学年向け、小学校高学年向け、中学生向けのブックリストを毎年作成し、夏休みの時期に園や学校を通じて配布している。0・1・2歳向けについては、改訂は行うが、毎年内容を変えて作成する

ことはしていない。

会 長：かなり様々な活動が行われているが、年齢が上になると取り組みが少なくなっている。

委 員：類縁機関へのサービスがあるが、中学校には実施がない、要望はないのか。

事務局：要望はないわけではない。過去には要望を受けて全市ではなく個別に実施したことはあるが、現在は、小学校を重点的に実施していることと職員体制の問題もあり、中学校には実施していない

委 員：要望があれば実施するということか。

委 員：小学校や幼稚園・保育園には、毎年度告知を行って希望を取り、年間1,200回ほど実施している。仮に中学校に告知を行って、市内の9校の中学校すべてから要望があった場合、現実的に対応は難しい。ただ、過去に個別の要望があった際は、ほぼ対応してきた。ユニークな例としては視聴覚室を使用して、インターネットの安全な利用方法や関連図書の紹介を行ったことがある。

委 員：図書館クラブとはどのようなものか。

委 員：震災後に予算が厳しい状況の中で、費用がかからない事業としてスタートした。またその背景として、小学校高学年以上を対象とした行事が少なかったこともある。参加した子どもにはただ楽しかった、で終わらずに、図書館サポーターになってもらって、行事の際に手伝いとして参加を呼びかけるなど、次につないでいく活動になっている。

委 員：小学校5年生の娘が参加したかったが、夏休みは帰省で参加できなかった。通年活動はないのか。

委 員：通年活動は、人員体制の問題で余力がなく実施できていない。そうしたニーズは、今後、図書館友の会でフォローしていきたい。

委 員：対象が19歳までとなっているのはなぜか。

委 員：高校に行っていないお子さんも参加できるように対象を設定している。ただし、こうした取り組みは多くが年齢制限で設定した一番下の年齢が多く、この場合は、小学5年生の参加が一番多い。

会 長：学校の職業体験との連動はないのか。

事務局：職業体験は別途実施している。本資料に記載すべきだった。

委 員：以前わらべうたの会に参加したが、地方出身のため、わらべうたがひとつもわからなかった。地方出身者にもわかるような会を実施してほしい。

委 員：図書館で行っているわらべうたは子育ての楽しみを分かち合うものであるので、浦安であっても東京であっても同じようなプログラムで行っていると思う。

委 員：自分だけが知らないわらべうただった。

委 員：最初は多くの参加者が、知らないと思う。今の親御さんの世代は子どもの頃にわらべうたに触れていないので、わらべうたを知らない方のための取り組みである。

委 員：そこで覚えたわらべうたを子どもに伝えるための取り組みでもある。

会 長：会のプログラムに、浦安のわらべうたはないのか。

委 員：ないと思う。

委 員：浦安市のブックスタートは、読書習慣がない保護者にとっては、子どもが生まれた

ら絵本を読んであげることが大切だと自然に理解できる、非常に有意義な取り組みである。本が好きでない人にもこういった環境は重要だと思う。

委員：特に乳幼児は自分で本を選べないので、親御さんに対する働きかけが重要である。

委員：子ども図書館にも、小さいお子さんを連れて行きやすい環境を作っていただきたい。

(4) 浦安の子ども図書館のあるべき姿について

事務局：資料7-1、7-2に基づいて説明。

会長：具体的な事例をお示しいただいた。ここから浦安市の子ども図書館が目指すものについて意見交換を行いたい。新しい子ども図書館の狙い、対象、機能、サービスについて、お一人ずつご意見をいただきたい。

委員：大人はその図書館に魅力があれば行くと思うが、子どもは自分では行けないので立地が重要になる。今のような世の中では、危険性を考えると、小学校のかなり上の段階でも親が同伴することが多い。良いものをつくっても、行きづらいと親が連れて行かなくなる。また、既存の図書館の恩恵を受けている人がさらに恩恵を受ける場所よりは、今あまり利用できていない子どもたちが行きやすいことが重要ではないか。場所は決まっているのか。

事務局：場所の選定はこれからである。新しく土地を買うことはないので、市の持っている物件の中で選んでいくことになる。団体のヒアリングでも、バスなどで行きやすいところというご意見が多い。そうした意見を踏まえて今後検討することになる。

委員：機能面でいうと、子育て支援、学校支援、浦安市で手薄になっているYAの取り組みが重要と考える。例えば学校支援については、17校が全校、クラス単位で子ども図書館に訪れ、調べ学習やおはなし会ができればよいのではないか。学校支援をやるなら、場所というより機能、人材が重要である。学校図書館の選書や業務について相談にのることができるような機能も必要だと思う。YAは実際に利用してもらうのが一番難しい年代。武蔵野プレイスの例があったが、立地の良さや学習スペースなど、プラスアルファの魅力が必要だと思う。もう一点が、今図書館を利用していない、利用できていない人への対応である。日本語を母語としない子どもや、障がいを持つ子ども、入院中などで来館できない子どもたちのためのサービスを機能として盛り込んでほしい。華やかに居住性を高めることよりも機能が重要だと思う。

委員：浦安市は長い間、図書館サービスを拡充してきている。そうした中で、新たに子ども図書館をつくる理由、子どもたちが子ども図書館に行く理由を明確にする必要がある。乳幼児は家族と、小・中・高校生は友達と来ると思う。自身の活動の中で、高校生から図書館に自分たちの居場所がないと指摘されたことがあった。子どもの年齢にあわせて、何を求めているかを確認しながら、子どもたちを受け入れる方法を考えていく必要がある。あそこに行きたい、あそこに行くとなんがある、という点を利用者に明確に伝えるべき。読み聞かせの声がうるさいという意見もあったが、読み聞かせをする図書館であるというコンセプトを明確に示せば、苦情があっても説明ができ、利用者がそれに合わせるようにしていくことができる。人員については削減されているということだが、図書館をリタイアした人を活用するというのはないか。こうした人材のパイプをつないでいけば、過去と現在がつながるのでは

ないか。

委員：浦安市の平成 29 年度の統計書によれば、0～5 歳児が 8,338 人、うち保育園児が 3,033 人、子ども園の 0～2 歳児が 66 人、合計 3,099 人。このほか幼稚園児 1,381 人で 4,480 人。保育園だけ見ても、5 歳以下の子どもの 37%が、平日は基本的には図書館を利用する層にはならない。幼稚園児を入れると 54%になる。中央図書館で実際にサービスをしていて感じたが、小さい子どもは来たくても来られないのが実態である。中央図書館の児童コーナーの利用状況を見ても、午前中は子ども連れがいるが、それ以上に大人の利用者からの読み聞かせの相談が多い。午後 1 時前後は小さい子どもはお昼寝をしているため、子ども連れは来ない。午後 3 時以降に園や学校から帰ってきた子どもで賑わうといった状況である。いろんな理想があると思うが、現実的にはいつも子どもたちがたくさんいる図書館はどう考えても作れないと感じる。また、利用を見ていると、小学校高学年で本をよく読む子どもは、大人の本を読みはじめる。子ども図書館で YA コーナーを本格的につくるなら、相当量の一般書を置かないと、YA サービスはできない。とすると、施設の規模は 2,000 m²規模になる。去年は児童書購入の 1 冊平均の金額が 1,400 円だったが、2,000 m²の施設には図書が 5～10 万冊必要であり、仮に新刊で 10 万冊を買い揃えた場合、1 億 4 千万円かかることになる。こうしたことから 2 つの考えを持っている。一つは、既存の図書館の活用である。今回の調査などで子ども図書館に対する様々な要望が出たと思うが、そのすべての要望を子ども図書館で請け負うのは難しいと思うので、例えば、中央図書館に YA サービスを思いきって投入し、子ども図書館では乳幼児など、YA 以外を対象にするといった、住み分けが必要ではないか。もう一点は、図書館に来られない子どもが増えていることを踏まえたアウトリーチサービスで、図書館から出向いてサービスすることと、そのバックアップ体制を作ることである。学校図書館には学校司書がいるので、小規模な幼稚園や保育園にこそ支援が必要だと感じる。居住性の高い施設をつくり、保育園が園児を気軽に図書館に連れて行けるような制度をつくれれば、昼間から子どもたちがたくさん集まる図書館が実現するのではないか。

委員：夏休みに市川市と柏市、おおたかの森、国際子ども図書館、高松ヒカリエの図書館に子どもと訪れ、各館の司書の方に、図書館ができて良かった点と悩みなどについてインタビューした。悩みとしては、子どもを連れてきた親が読む本がほしいという要望が多いということと蔵書が増え、本を置くスペースが少なくなって困っているという話があった。また、どこの図書館に行っても、浦安市の図書館について話をすると、浦安市の取り組みの良さが知られていた。浦安はディズニーランドや海のイメージが強いと感じていたが、図書館のイメージもあるということに改めて認識した。私自身は、以前図書館に行くこと自体少なかったが、浦安に住むようになってから、図書館に頻繁に足を運ぶようになった。それは、徒歩や自転車で行ける館が複数あることや司書の方の対応など、図書館が身近に感じられることが大きい。保護者が子どもを連れて公園に行くような感覚で図書館を利用できることが、浦安市の図書館の特徴であると思う。図書館に行っても、本の相談のほか子育ての悩みを相談できるような人がいればありがたいと感じる。今の保護者は子育ての悩みが

あってもネットを見て終わるケースが多いと思うが、身近な図書館でそうしたことも相談できる人がいれば助けになる。小学生の子どもも、児童館や公園に行くような感覚で、図書館に通っている。子どもたちだけで図書館に行くこともあるので、安全性を考えると図書館に入った時に親に知らせが行くような仕組みがあるとありがたい。また、飲食スペースや自習スペース、展示スペースなど、学校段階に応じた場所も必要と感じる。

委員：YAサービスの充実と、図書館に行く理由を明確にすることが重要と感じる。図書館が子どもの居場所になるとよい。また、子ども図書館という名称にすると、YA世代の反発がありうるので、名称を浦安未来図書館などにすることも考えてはどうか。またYAのコーナーに大人がいると近づきにくい雰囲気になるので、図書館をおしゃれな雰囲気にして、居眠りをする大人がいないような環境にすると良いと思う。実際に休日に図書館に子どもを連れて行く親は1割ぐらいだと思う。そういった保護者を大切にするためにも、読み聞かせがうるさいという意見に対して理解を促せるようなコンセプトが必要だと思う。高学年にも読み聞かせをしてほしいが、図書館がよみきかせを実施している時間帯は習い事などで行きづらいので、その点も考慮してほしい。

委員：子どもが子どもらしく過ごせる場所はどんなところか考えると、それぞれの世代によって違う。子ども一人ひとりがゆったりと過ごせて、本に親しめる環境を作るには、世代によって入口を変えたり部屋を区切るなど、いろいろな対応が考えられる。ある小学生は、図書館で友だちとのんびり過ごしていて、つい話し声が大きくなってしまい、注意されたので足が遠のいてしまったということだった。また、学校教育の視点から考えると、学校図書館の支援センターがあるとありがたい。現在、郷土博物館で小学3年生が郷土の学習を行っているが、例えば子ども図書館でもクラスや学年単位で受入が可能なスペースがあれば、新しい形の主体的な学習にもつながる。個人的には自分の子どもが図書館で勉強していた際、自習で占有する時間が長いと注意されたことで、図書館から足が遠のいたという経験もあった。YA世代は学習も含め、自分の時間を図書館で過ごせることも必要だと思う。

委員：浦安は他の自治体よりも、図書館が充実しており、身近であると感じるが、実際に分館の児童コーナーに行くと自分たちの声が響いてしまうので、本を借りるだけになっている。子どもが声を出して本を読んでも違和感のないような空間をつくるなど、既存の図書館とは違う図書館にする必要がある。平日の利用を考えると、親が連れて行けるのは0～2歳までで、3歳以上は幼稚園や保育園に通っている。保育園・幼稚園・子ども園は、クラス単位で定期的に子ども図書館に行き、先生や司書の方たちと交流したり遊んだりできるような場があると良いと感じる。浦安市には泥んこ広場があって、公民館の近くから送迎バスが出ており、子どもは園の行事として行って一日遊んで帰ってくる。仮にこの泥んこ広場のバスのルート上に子ども図書館ができて、幼児期を浦安市で過ごした子どもたち全員が、泥んこ広場や子ども図書館を経験していれば、そこが楽しい場所であるという共通認識が子どもたちの中に生まれると思う。また、子どもたちだけで行ける安全面が考慮されたシステムができれば、小・中学生が自主的に放課後に行けるような場所になるのではな

いか。

委員：浦安市で子どもが生まれて絵本をいただいたが、その次に読んだらいい本を今よりももっと提案していただけるとありがたい。不読率を低下させるには、新しい取り組みが必要である。例えば、好きな本と類似している本を読みたくなった時、本をすぐに見つけられるようにして欲しい。実現可能かわからないが、ネットで買い物をするとこの本を買った人はこの本も買っているなどと案内が出るように、図書館でも本の紹介のシステムを作ることができればいいのではないか。本のディスプレイについては、本を置くスペースにも限りがあるので、液晶画面等で紹介すれば、スペースが確保できると思う。また、本で知識を得た後にそれを実践する場、例えば料理の本を借りた人に料理を実際に体験するには浦安市のどこに行けばいいかを紹介するなど、知識と実践の手軽な橋渡しの仕組みがあるといい。また、他の方の意見と重複するが、滞在時間よりも行きやすさ、来てもらいやすさが非常に重要であると思う。そうした意味でも、子どもを保育園などの活動の中で図書館に連れて行ってもらえると非常に助かる。また、小学生になるとなかなか図書館に行けないので、コストの問題もあると思うが、長期休暇の期間などの対応も含めて学校図書館を開放してもらえるとありがたい。子どもの反応については、自分のことを言えば、30年以上前だったが、図書館のカードを初めて作った時に、本を入れるバッグをもらった。絵本の主人公の絵が描いてあり、今も記憶に残るぐらい嬉しかった。子どもはそういうことをよく覚えていてそれだけで楽しめる。PTA で意見聴取した際に、図書館の読み聞かせに参加してシールを集めて折り紙のメダルをもらったことが、子どもにとってすごく良かったという意見があった。折り紙の折り方も実際に教えてもらえたら良いという意見もあった。本を読めというだけでなく、本の導入として本に付随した楽しみがあると本につながっていく。子どもの読書の発達段階の取り組みの資料をみると中学生以降は先細っており、中学生をどう取り込むかが重要だが、中高生には小さい子どもといたくないという思いもある。中・高校生までまとめて子どもとは言えないのではないかと感じる。高校生に興味を持ってもらうには、職業体験というよりもボランティアやアルバイト、インターンシップのように、職員として決まった期間働くような仕組みがあってもいいのではないか。

委員：皆さんのご意見をうかがうと、新しく子ども図書館ができるからそこに何かを求めるということでもないように思う。浦安の児童サービスはすでに特化している。本日も中央図書館を見学したが、蔵書や職員の運営に対する考えもレベルが高い。さらに新しい図書館をつくるとなると、今までの児童コーナーとの関連や位置づけがどうなるのかわからなくなった面もある。子ども図書館ができて中央図書館の児童コーナーが薄くなるということではなく、両方が相互に支えあう、その形を明確にする必要がある。また、まだ立地や面積がはっきりしていないが、子どもが行ける場所か、どの程度の収容者数なのかも問題となる。アクセスについては、施設周辺の子ども以外にも利用してもらうために、送迎というアイデアも必要かもしれない。今までの児童サービスにプラスアルファして、既存のサービスを底上げしつつなおかつ新しいコンセプトを打ち出すことが必要。事例に武雄市の図書館があったが、武雄市には親子が安心して過ごせる場所がほかにないので、当然居住性も求め

られており、浦安市とは背景が異なる。建物や年齢層も重要だが、浦安市らしさを考える必要がある。また、浦安市全体の児童サービスの連携・協力をコントロールできるような機能も持たせる必要がある。

会 長：児童サービスの拠点としての機能をしっかり果たしていただきたい。浦安市の既存の児童サービスを支えてほしい。平日に子どもが来ないという指摘もあったが、小学校や園との連携が大きな鍵となる。また、障がいのあるお子さんとその家族、外国籍のお子さんとその家族など、図書館になかなかアクセスできない人のことも考慮していただきたい。自身の経験からいっても、外国の図書館に母国語の本があることは非常に嬉しいものであるので、配慮いただきたい。また、お父さんのコーナー、祖父母のコーナーなどがあるとよい。ご意見を聞いていて感じたこととして、子ども図書館の名称をどうするかは大きな問題だと思う。自分が高校生だったら子ども図書館には行かない。中央図書館に YA を充実させて、子ども図書館と住み分けをするというご意見もあったが、中高生をどう引き込んで、大人の読書につなげていくかは重要であると思う。他にもいろいろあるが、非常にたくさんの意見があったので市としてもお困りかもしれない。なんとなく皆さんの考えが共通化されたのではないか。これだけは言っておきたいということがあれば、また事務局に伝えていただきたい。盛り込めるところは事務局で、盛り込んでいただきたい。

(5) 次回会議の予定について

事務局：次回の懇談会は、12月14日（金）に10階協働会議室で開催の予定。一点、報告になるが、現在、郷土博物館でふるさと浦安作品展を開催している。小学生の部において、子ども図書館の構想をテーマとした「わたしの子ども図書館構想計画！」という作品があり、最優秀賞である市長賞を受賞した。10月14日（日）まで作品紹介を行っているので、お時間があるときにぜひ見ていただきたい。

5. 閉 会

以上